

ピアノ演奏技術に及ぼす M. L. での集団レッスン効果

柏瀬 愛子

The Effect of Music Laboratory Group-Lesson on Piano-Playing Technique

Aiko KASHIWASE

はじめに

最近、本学における児童教育学科の器楽履修状況が様変わりしつつある。その変化の主たるものは〔① 以前と比べピアノ履修の経験が全くない初心者、もしくはこれに準じる者が増えている。② 「器楽Ⅱ」(選択)を履修しない者、もしくは途中で放棄する者が年々増えている。③ 「器楽Ⅰ」(2年次開講・必修)で課せられる課題が期間内に終了出来ず、単位習得が3年次になる者や、最終学年まで持ち越してしまう者も少なくない〕などである。

短期間である程度のピアノ演奏技術を習得するという事は、全くの初心者や経験の浅い者にとっては、かなり苛酷な練習と努力が必要であるため、これを嫌って②③の現象が出てくるものと思われる。技術を習得するためのカリキュラムは、一応各学年で独立させてはあるが、「器楽Ⅰから器楽Ⅱ」への一貫性も持たせてある。従って、極端に進度の遅い者や中途放棄をする者が多くなることは、器楽教育として教育効果をあげることが出来なくなる。また、卒業後、教育現場に立つ様になったとき、子どもの指導にも事欠くのではないかと案じられる。

この現象を少しでも改善していくためには、鍵盤楽器を嫌う学生に対するレッスン方法を改めなければならないと常々心していた。

その方法としては、まず音による遊び心を育て、苦痛を感じるようなレッスンから解放し、鍵盤楽器への興味付けと練習が楽しくなるような仕向けをと考えていた。

1993年度、学生数の増員に伴い不足してきたピアノ台数の補充に際し、高性能をもち、初心者でも楽しみながら技術の習得が出来る楽器として、近年教育現場に普及されだした電子楽器(M. L.)が導入されることになった。そこで、これを機に従来からのピアノレッスンと、M. L.での集団レッスンを併用させた授業を試み、学生の反応と教育効果を追求してみた。本報告は、集団レッスンに対する学生の反応と、このシステムを軌道にのせ、学習効果を上げるための授業構成について述べるものである。

I Music Laboratory (M. L.) のシステムとは

Music Laboratory (M. L.) のシステムは、指導者用楽器と生徒用楽器をML装置で接続して、集団学習の中での個別学習やグループ学習などを行なうものである。このシステムで使用されるのは、通称クラヴィノーバ (Clavinova) と呼ばれ、最新のエレクトロニクス技術が集結された高性能をもつ集団レッスン用の鍵盤楽器である。これは、ピアノと全く同じ要領で使用する

楽器であるが、AWM音源が搭載されているので数種類の音色を楽しむことも出来る。また、コミュニケーション機能を利用すれば、練習中に指導者から演奏上の指示を受けることや、模範演奏と合わせて弾くことや、友達と合奏やアンサンブルを楽しむなどいろいろなことが出来るので、練習者は単なる技術習得に終わらず、演奏を楽しむことも可能な万能楽器である。機器は、学生用 (M. L. P-51) と教師用 (CVP-65) 調整卓付きの2種類がある。

1 学生用の機器 (M. L. P-51) について (文末に掲載 図1)

最小単位は1台であるが、グループを組ませたいときには、最大8台までが可能となっている。他人に邪魔されずに練習がしたいときには、スピーカースイッチをオフにしてヘッドホンを使えば、自分の進度に合わせた練習を自由に行うことが出来る。また、スピーカースイッチをオンにすれば、指導者の声をはじめ模範演奏、友達の演奏を聴くことや、マイクを通して会話することも出来る。内臓のスピーカーから音を出し自然の状態で行奏したいときは、ヘッドホンを使わずにスピーカースイッチをオンにすれば、ピアノと全く同じ状態となる。

各部の名称とその働き

- ① 電源スイッチ：パワーとも呼ばれる。電源を入れたり切ったりするスイッチ。
- ② ヘッドホン端子：底面の左側と裏面の右側の2ヶ所にある。マイク付きヘッドホンを接続することによって、自分の演奏音をはじめ模範演奏、友達の演奏等を聴くことが出来る。また、必要に応じ指導者との応答や友達と会話を行うことが出来る。
- ③ スピーカーボタン：通常はスピーカーオフの状態で使用するが、内臓のスピーカーから外部に音を出したい場合や、指導者との応答他合奏などをするときには、スピーカースイッチをオンにする。
- ④ ボリューム：音量の調節時に使う。レバーを右に動かしていくと音が次第に大きくなる。
- ⑤ 音色切替ボタン：本機では次の6通りの音色を選ぶことが出来る。好みのボタンを押すことによって音色が選択される。

PIANO (ピアノ) コンサートピアノ・グランドピアノの音

HARPSI (ハーpsiコード) バロック感覚の楽器音

VIBES (バイブ) 金属的で独特な響きをもつピブラフォンの音

CHOIR (クワイア) 合唱の響きをもつ音

STRINGS (ストリングス) 弦楽器の音

WOOD (ウッド) フルートの音色に似た木管楽器の音

- ⑥ リバース切替スイッチ：音の響きを豊かにするための機能。4段階に変えられる。
- ⑦ メトロノームボタン：ボタンを押すことによって内臓されているメトロノームを鳴らすことが出来る。音量は通常(2)で表わされているが4段階に分けられている。メトロノームを作動させたい時にはレバーを左右させて、自分の好みに合わせた音量を選び使用する。
- ⑧ ブリリアンススイッチ：音質を変える機能。
- ⑨ テンポボタン：メトロノームテンポ調整機能。通常♩=120に設定されているメトロノーム音を、ボタン操作によって演奏曲に指示されている速度に変えることが出来る。
♩=32から♩=280までの範囲が設定されている。なおこの機能は、移調量(音程を変えたいとき)数値表示で行なうときにも使用する。
- ⑩ パフォーマンスメモリーボタン：演奏記録機能。3トラックあるので、右手、左手、両手の順に練習成果を録音していくことが出来るが、電源を切ると全て消去され録音フロッピー

として残すことは出来ない。

- ⑪ コールボタン：コミュニケーション機能。ボタンを押すと調整卓に連絡される。両者の間でマイクを通して会話ができる。
- ⑫ MIDI/トランスポートボタン：トランスポートボタンは、ペダル効果をだしたいときや、移調奏をしたいときに使用する。また、out 端子を使って他のキーボードやシーケンサーに接続すれば、幅広い音源が得られるようになるので演奏をより楽しむことができる。
- ⑬ その他の機能：このほかにテンポ、小節数、拍子表示器などが設置されている。

2 教師用の機器 (CVP-65) について (文末に掲載 図2)

基本的には学生用と同じであるが、リズムスタイル部、音色部、ディスクオーケストラ部での内臓機能に充実が見られる。そこで、この3部門についてのみ補足する。

- ① リズムスタイル部：あらかじめ内臓されたリズムパターンは24種類であるが、付属されているディスクスタイル内にも40種類のリズムが設定されている。従って、計64種類の異なったリズムを出すことができるのだが、これらのリズムには、さらにノーマルとバリエーションの2パターンが置かれ、総計128種類の異なったリズムを演奏することができる。通常はポップス1の標準テンポ(♩=86)に設定されているので、演奏者はリズムボタンを操作し好みのリズムスタイルを選ばねばならない。
- ② 音色部：53種類の音色が内臓されている。パネル表示を使って音色を選ぶ場合と、テンポボタンの横に設定されているボイスボタンを押しながらテンポボタンを押し音色番号を設定する場合とがある。また、単独音での演奏の他に、2通りの音色を合わせた演奏をすることも出来るが、いずれも操作方法に通じねばならない。
- ③ ディスクオーケストラ部：ディスクオーケストラには、あらかじめ内臓されている数曲のデモンストレーション曲がある。これらの曲の自動演奏はもとより、あらかじめ作成されている音楽ソフトを使って模範演奏を聴くこともできる。また、こうした演奏に合わせて練習することもできるし、他の電子楽器と接続させて同時演奏を楽しむことも可能である。また、フロッピーディスクを使えば、自分の演奏を録音、再生することができるので、技術向上への錬磨に役立てられる。この他に、ディスクコピー、内容消去などもできるので機能を十分に使いこなせるようになることが必要である。

3 調整卓 (MLC-2) について (文末に掲載 図3)

調整卓とは、指導者用楽器(親機)と学生用楽器(子機)との交信を中継する役割をもつ。MLシステムでは不可欠な機器で、先進のエレクトロニクス技術が結集されている。

機器が持つ優れた性能を十分に発揮させれば、きめ細かな集団指導、並びに個別指導が能率的かつ効果的に進めることができる。

調整卓の特徴

- ① 相互通信のコントロールができる：親機と子機との間で演奏のやりとりや会話の統制ができる。集団レッスンの中にあっても円滑な個別指導ができる。
- ② 簡単にできる合奏編成：1ブロックの中での合奏編成組み合わせが(2人、4人、8人)簡単にでき、その編成状態の確認は、ブロック並びにペア表示ランプの点灯にによって一目で確認することができる。
- ③ 自動検聴システム：全員または指定したあるブロックの学生の演奏を自動的に聴くことが

できる。この場合の検聴時間は、選択幅が三段階（3秒、6秒、9秒）となっているが、いずれも非常に短い。そこで、ボタン操作によって任意の学生の演奏を希望する時間だけ検聴することもできるようになっている。

- ④ 2種類の音素材：音素材A（指導者の楽器音）音素材B（外部入力からの音）などを別々にして、ブロック別に聴かせることができるので、教室内を2分した指導も可能である。
- ⑤ 子機からの呼び出し：質問がある学生の呼び出しに答えて、個別またはそのグループ全員に指導することができる。
- ⑥ 公開演奏システム：模範演奏を聴いたり、お互いの練習成果を発表し合ったりできる。
- ⑦ メモリーシステム：異なった状態を設定したい場合、前の状態を2種類までメモリーしておくことができる。メモリーしてあれば、違う編成をした後でも前の状態にすぐ戻すことができる。

機器の仕組みと名称

正面部には、左側より電源スイッチ、ヘッドホン端子とマイク端子が、右寄りに他の楽器やオーディオ装置などに接続する外部入力端子と外部出力端子が並ぶ。上面コントロール部には左上から音素材、自動検聴、合奏、指示、合奏モニター、一斉解除等のボタンが並び、中央部にブロック、ペア、4人グループ表示ランプが付設された子機選択ボタンが、右側には上からメモリー、音素材モニター、模範演奏、スピーカーボタンと指導者マイクボリューム適ランプ生徒ボリューム、外部入力、出力のボリューム調整レバー等が設置されている（図3参照）各々のボタンを押すに当っては、それぞれの目的に合わせ単独あるいは2つを合わせるなどするので、誤ることなく押せるよう操作方法に精通しなければならない。

コントロール部の操作方法（使用頻度の多いものについて触れる）

- ① 自動検聴：演奏状態を把握したいときに使う機能。全体かブロックかのボタンを押す。次いで希望する秒数を選んでセットする。検聴が開始されたと子機選択ボタンのランプが点滅し各機の検聴が確認される。最後までいくと自動的に検聴は解除される。また、途中で止めたいときは自動検聴「全体ボタン」を押すと解除される。1人の検聴を長くしたいときは「休止ボタン」を押す。また指示「個別ボタン」を押せば、会話することもできる。
- ② ペア表示ランプ：合奏編成をしたいときに使う機能。同一ブロック内での組合せのみ可能
ア 2人（メモリー1のボタンを押す。子機選択ボタンのペア表示ランプが点灯し、ペアとなった2人の間で会話や演奏の交換ができる。この他「合奏2」のボタンを押しながら子機選択ボタンのいずれか一方をつぎつぎに押しペアを作る方法もある）
イ 4人（メモリー2のボタンを押して同一ブロックを2分、4人のグループを組ませる場合と「合奏4」のボタンを押しながら同一ブロックの1と5を押してグループを組ませる場合とがある）
ウ 8人（「合奏8」のボタンを押しながらブロックのいずれか1人の子機選択ボタンを押せば、ブロック全体の表示ランプが点灯しグループが完了したことの確認ができる）
こうした組合せを解除するときは、組合せをしたときのボタンを再度押すか「一斉解除ボタン」を押す。また、電源を切れれば自動的に解除されるので、ペア状態を残したいときにはメモリーしておくことを忘れてはならない。
- ③ 模範演奏：演奏の参考にさせるため指導者の生演奏や録音、友達の演奏を聴かせる機能。指導している者が直接演奏して聴かせる場合は、スピーカー「指導者ボタン」を押して、指導者用楽器のスピーカーから直接音を流せばよい。そのほかは、全て模範演奏「外部出力ボ

タン」を押すことによって操作する。また、模範演奏「ヘッドホン」を押したときは、生徒同志の演奏や会話を聴くことができる。

- ④ メモリー：音素材の選択、合奏編成をしたときに、その状態をメモリーしておけば、内容を変えた後でもすぐ元の状態に戻すことができる便利な機能である。操作は、メモリー「セットボタン」を押しながら「1か2」のボタンを選んで押す。ランプが点灯し記録されたことが確認される。再現させるときは、設定がメモリーされている方のボタンを押す。設定を解除したいときは「一斉解除ボタン」を押す。このシステムの欠点は、外部入力、外部出力並びに音量調整の設定が記録できないことである。
- ⑤ コミュニケーション：生徒側からの質問に答え、個別あるいはその生徒のいるブロック全員に指導することのできる機能。子機側から呼び出しボタンが押されると、子機選択ボタンのその箇所のランプが点滅し交信が知らされる。点滅している子機選択ボタンを押し呼び出しに答える。交信中に他の者から呼び出しがあったときは、応答順番待ちで押されたボタン全てが点灯している。前者との交信が解除されると、次に早く呼び出した者のボタンが点滅に変わるので公平な交信をすることができる。交信解除は、呼び出しをした子機選択ボタンをもう1度押すか、合奏モニターと子機選択ボタンを同時に押せば交信が解除される。

ここに述べた ML システムの機器操作は、ごく1部の基本的なものであり、多重録音等の複雑な操作には未だ触れていない。またの機会に、他の電子楽器との併用方法や、コンピュータとの接続などを含め、細かい複雑な操作方法についても述べてみたい。

効率的なレッスンを可能にするこのシステムを通して、我々が持つ目標「演奏技術の獲得、音によって遊び心を育て、音楽嫌いをなくしていきたい」を達成させていきたい。そのためには、教師と学生、両者の機器操作熟達が望まれる。

II 集団レッスンの実践にあたって

1 授業計画（個人レッスンと集団レッスン併用のための授業計画）

以下に示す今年度の器楽履修内容の大綱は、昨年度後期より本格的に取り入れた、ML レッスンでの学生の反応、並びに教師側の反省などをふまえ、検討しながら作成したものである。なお、器楽Ⅰの①は判定試験に合格するまで他の課題と平行させながら練習し指導を受けなければならない。ちなみに今年度のバイエル合格率は、4月 66%（前年比+15%）6月 64%（前年比+13%）9月 8%（前年比+2%）である。また、②の試験は実施せず、個人、集団のいずれのレッスンでも合格印を受けることができる。③以下、器楽Ⅱでは、全ての課題を終了させた時点で、試験に臨まねば単位を修得することはできない。試験はバイエルの認定を除き年4回（6、9、11、2月）行なわれる。

1) 「器楽Ⅰ」（必修）2年次通年 2単位

- ① P バイエル 入学後、自習が指示されている。成果判定を講座開講当初に行なう。
- ② M スケール・カデンツ（C・D・F・G・Bdur と a moll の2オクターブ上下行及びカデンツ）
- ③ M マーチの速度で移調奏 蝶々・きらきら星・ちゅうりっぷの3曲を C・D・F・Gdur へ移調させる
- ④ P ルモアーヌ 子どものための50の練習曲集より 任意5曲以上
- ⑤ P 自由曲 ブルグミュラー25の練習曲または、大村典子 ピアノ・ピース・セレクション NO.5 「さまざまな感情」より 任意曲2曲以上

⑥ M 弾き歌い 「歌って弾こう」より 21曲 指定

* 注 Pはピアノのことで、MはM. L.による集団レッスンのことをしめしている。
(器楽Ⅱも器楽Ⅰと同様である)

2) 「器楽Ⅱ」(選択) 3年次通年 2単位

- ① M・P 小学校唱歌共通教材1～6年 24曲 (合格印は個人レッスンでもらうこと)
- ② P 自由曲 器楽Ⅰより高度な曲で 2曲以上 自由選択
- ③ M アンサンブルと創作 自由選択 (全ての課題を終了した希望者のみ)
- ④ M 初見・伴奏付け (併用レッスンの効果をねらって立案した今年度の提示課題)

(初見) 練習問題		M. L.	個人レッスン
1	リズムの練習 (教)P.184 1-6・リズムカノン	(声) P.7~11	(声) P.7~11
2	右手の単旋律 (教)P.186 2.3.6.7.9.	プリント No.6 No.5より	プリント No.4より
3	右手の単旋律(教)P.188 12.13. (教)P.208 小鳥の歌 P.216 線路はつづくよ	プリント No.9より	(声)P.30 No.46
4	右手の単旋律(教)P.188 11 (教)P.211 おばけなんてないさ	(声) P.29 No.41	(声) P.29 No.40
5	右手の単旋律(教)P.187 10 (教)P.140 茶色の小びん	プリント No.10より	(声) P.28 No.33
6	左手の伴奏形 (教)P.211 こぎつね (教)P.218 川はよんでる P.18 夜汽車	(教)P.217 グリーングリーン	(教)P.224 エーデルワイス
7	左手の伴奏形(教)P.21 エチュード (教)P.210 いるかはザンブラコ	(教)P.209 うれしいひなまつり	(教)P.219 ドナドナ
8	両手(教)P.208 小鳥の歌 (教)P.210 らくだ P.216 線路はつづくよ	プリントより	(教)P.213 おどろろ楽しいポレチケ
9	両手 (二声) (教)P.189 1 P.134 ポルカ	(教)P.189 No.2 (声)P.35 No.4 P.36 No.7	(コルユーンゲン 2巻) No.1.5.26
1	伴奏付け I・V・V ₇ (コードネーム) (教)P.65 かたつむり(伴奏付き) P.212 山の朝(コード) (声)P.66 大きな声で(コード) 夜が明けた(無印)	子守歌	(コードトレーニング)
2	I・IV・V (教)P.67 日の丸 (教)P.73 春がきた (教)P.77 夕焼けこやけ	(コードトレーニング) P.30 No.21.33	(コードトレーニング) P.30 No.18 20
3	短調 I・IV・V (教)P.209 うれしいひなまつり (うたってひこう)P.74 ヤンチャリカ	プリントによる	(コードトレーニング) P.35 No.29 P.23 No.3

2 考 察

1) 個人と集団レッスン組み合わせ授業の運行方法から

個人レッスンは、個々の学生の力量に合わせた指導という面では欠くことができない。しかし、1人に十分時間をかけることができず、きめ細かい指導とはなりがたい。その点集団レッ

スンは、課題のポイントを説明した後は自由練習をさせ、その間に個々の課題達成状況を検聴しながら必要に応じた指導をすることができる。また、個人レッスンでは経験させられないアンサンブルや、音質変化、模範演奏との合奏などさまざまなことが可能となるため、1対1のレッスンより解放感があり、初心者や演奏が不得手な者にとってはメリットがあると考え、従来通りの個人レッスンと、新規集団レッスンを次のような時間運行で実施してみた。

① 2年次のグループ編成 (1グループ30分)	② 3年次のグループ編成 (1グループ45分)
Aグループ 集団レッスン(a) (a-b-c)	Aグループ 集団レッスン(a) (a-b)
Bグループ 個人レッスン(b) (b-c-a)	Bグループ 個人レッスン(b) (b-a)
Cグループ 自習 (c) (c-a-b)	

A. B. Cのグループは(a)(b)(c)に従って、30分交替でローテーションしていく。

2年次が3交代の理由は、クラス人数と楽器台数との関係からであるが、各グループに自習時間があることは、その時間に練習をするか否かは個人に任されることになる。従って、練習の嫌いな者は遊んでしまいかねない。また、教室交代にも時間を取られる。できれば3年次同様2交代制が望ましい。

グループ編成は、両学年ともに個々の進度を考慮せず出席番号順で編成したため、課題到達の練習にかかる時間差が大きく、弾ける者の足をひっぱる感が強い。グループ編成の改善、すなわちグレード制にすることを考えねばならないが、付加する諸問題が多く、今すぐ実行に移すことはできないが、早い時期に実現させねばと考える。

2) 授業展開方法

1 2年次の授業展開

各グループとも30分交代であることは先に述べた。この時間を有効に使う個々の力(楽典理解、演奏技術の向上並びに演奏の楽しさを味わうなど)を伸ばしていくためには、ただ弾くことに徹するのではなく、いろいろな方法をもってレッスンを興味深いものにしなければならない。教材の難易度により多少異なるが、ほぼ次のような方法を取っている。

使用教材と指導展開の方法

a) スケール・カデンツ(テキストなし) 指定されている調の構成、指使いなど教師の範奏をテレビモニターに写しこれを見せながら説明→模奏→自由練習(検聴・巡回指導を含) 検閲(合否判定)の順をとっている。巡回指導をする理由は、学生の手元が写しだされる設備がないため、正しい指使いがされているか否かを見るためである。検閲は集団・個人の両レッスンで受けることが出来る。自由申告制なので申し出のあった者に対して行なう。

b) 移調奏並びに弾き歌い

この課題では移調奏、弾き歌いともに【幼児歌曲集「歌って弾こう」音楽之友社】のテキストを使用。練習過程は課題の難易度により多少異なるが次のような流れが取られている。

- ① 自由練習(当日の課題) 全員が集まるまでの時間利用
- ② 課題のポイント説明(リズム、調性、表情演奏法など必要に応じた内容の説明)
- ③ 右手旋律(リズム、表情を出した詩の語らいを含め)の練習
- ④ 左手伴奏の練習
- ⑤ 両手での練習(③~⑤までは楽器音を解放し全員が揃って練習する)
- ⑥ 音閉鎖で個人練習(教材の難易度により時間は異なる) 検聴・個別指導

⑦ 音解放で全員合奏・個人、グループでの演奏・カノンでの演奏など

⑧ メロディー・伴奏に分かれてアンサンブル (2人ペアで)

ここで合奏方法について触れてみたい。ペアの組合せは、同一ブロック内なら2人、4人、8人の組合せができる。この学年では、2人1組が主流となっている。その展開方法は、

a ① ピアノの2段譜 (右手、左手) を各々が分け合って練習

② 4手連弾用楽譜で合奏練習・個々に音色を変えたアンサンブル

③ メロディー譜と伴奏譜に分かれた練習 (伴奏は両手伴奏形を使って) などである。

また、4人の場合は、各ブロックごとで2組を編成 (1~4・5~8番で)

b ① ソプラノ、アルト、テナー、バスの4パートに分かれて練習

② 4手連弾用の教材を使って4人で1手ずつ分け合って練習

③ Voiceのメロディーと2段ピアノ譜の練習など、2人組より高度になってくる。さらに、8人1組による場合は、各ブロックごとでチームが編成され、上記a、bの内容を組み合わせ合わせた練習や創作、カノン、演奏リレーなどができる。

2 3年次の授業展開 (45分交代で)

使用教材と指導展開の方法

前期期間は初見奏が主であるため、教材は、音楽科教育法 [音楽之友社] と女学生のための声楽教本 [教育芸術社] 並びにオリジナルのプリントを使っている。授業展開は、練習課題の自由練習 (待ち時間) → 練習課題での全員合奏 → 課題提示 (ポイントの説明) → 片手練習 (右手・左手) → 両手練習 → 音閉鎖で個人練習 → 全員、ブロック、列などでの合奏・個人メドレ・カノン等その日の課題曲に応じた方法 (音解放) で進めている。また、音色を変えたり、リズム変奏、2人組みの合奏などを取り入れることもある。

この初見練習の目的は、正確な楽譜の読取りやリズム把握にあるので、毎回5~6曲以上の曲が指定される。既知の曲も含まれてはいるが進め方はかなり早い。また、課題提示も簡略化させテレビモニターの画面を通して行なっている。見づらく弾きにくい様子がうかがわれる。今後課題は次第に難しくなっていく。集団指導導入にあたってもらった「ねらい」から逸脱しないようにしたい。そのためには今日までの実践を踏まえ、授業計画の再検討をと考え、前期終了を機に、学生がM. L. 集団指導をどう受けとめているか調査してみた。

3) M. L. 集団指導に関する調査

① 調査理由: M. L. 導入により、従来のレッスン方法が大幅に変更された。その結果、学生が、どのような意見や感想をもっているのかを知り、授業計画の再検討をするとき、その声を反映させたいという思いからである。

② 対象: 「器楽Ⅰ」(必修)の履修途中である2年生123名と、「器楽Ⅰ」(必修)の単位を修得し「器楽Ⅱ」(選択)の履修途中である3年生43名 計166名

③ 方法: 質問紙法

④ 調査時間: 2年生 平成6年9月13日(火)・3年生 平成6年9月16日(金)

⑤ 調査内容: A) 1コマの中でピアノの個人レッスンと、M. L.の集団レッスンをするこの是非。B) グループ構成の方法。C) 使用教材。以上3点について。

ピアノ演奏技術に及ぼす M. L. での集団レッスン効果

⑥ 集計結果

質 問 事 項		2 年 生 の 回 答 結 果		3 年 生 の 回 答 結 果	
A	a 1 コマの中に、個人レッスン、集団レッスンがあつてよい	71名	58%	29名	67%
	b 個人レッスンだけの方がよい	20名	16%	6名	14%
	c 集団レッスンだけの方がよい	2名	2%	—	—
	d どちらともいえない	31名	25%	9名	21%
B	a 現在のような出席番号順でのグループ編成がよい	69名	56%	13名	30%
	b 進度差があるのでグレード別グループ編成がよい	40名	33%	23名	53%
	c 時間の途中で交代するより隔週交代にする方がよい	15名	12%	8名	19%
	d その他（自由に意見を書いてください）	4名	3%	—	—
C	a いまのままでよい	96名	78%	28名	65%
	b つまらない	4名	3%	3名	7%
	c 毎回変化がほしい	19名	15%	7名	16%
	d その他（自由に意見を書いてください）	3名	2%	5名	12%

⑦ 調査結果の分析：アンケートの集計結果から学生の意見や感想を分析すると、

A の項目について：1 コマの中で、ピアノの個人レッスンと M. L. での集団レッスンが行なわれることについては「良い」という意見が半数以上を占めている。しかし、従来からの個人レッスンの方が「課題を自分のペースでこなしていけるのでは」と思っている学生も割合としては少なくない。また「どちらとも言えない」とあるのは、両レッスン方法の良い面や工夫しなければならない面、ならびに物理的、時間的に不可能な面などの現れであると思われる。

B の項目について：集団レッスンのグループ構成に関しては、2 年生と 3 年生の意見が逆転する結果となった。現在、M. L. 保有台数の関係から、クラスを出席番号順で分けた方法をとっている。この点について多くの 2 年生は「このままで良い」と答えているのに対し、3 年生は「グレード別」という意見を出し、進度差に注目しているのは「器楽Ⅱ」が選択だからではないかと思われる。履修者の中には課題未到達でやむなくという者をはじめ、技術の上達を望んでいる者など、その技量はさまざまである。「進み方が早くついていけない」「待ち時間が長すぎる」などの意見を尊重し、グレード制への改善を検討課題とせねばならない。

隔週レッスン（ピアノ、M. L.）にすることは、両学年ともに低い比率であったことは、A の回答「良い」に通ずるものであり、変化のある学習を求めているのだと思われる。

C の項目について：教材に関しては「今のままでよい」が圧倒的多数を占めていたが、よりよい授業展開を行なうためには、課題について一層の検討をしていく必要がある。なお「毎回変化がほしい」と答えた者に対する手立ても必要かと思うが、どんな変化を期待するのか今一步踏み込んだ調査をしてみたい。3 年生に関しては、後期に伴奏付けや自由曲、アンサンブルなどが入ってくるので、おそらくこの問題は解決されていくことになるとと思われる。

今回の調査は、ごく簡単なものであったが、集団指導に対する学生の反応は一応つかむことができた。今後これらの意見を反映させながら、指導方法を充実したものにしていきたい。

4) 今後の方針（音楽教科目内での M. L. 利用を含む）

計画的なプログラムに従っての、M. L. 集団指導は、現在のところ「器楽Ⅰ・Ⅱ」のみである。この半期間の実践を通して指導効果をみたとき、認定試験（バイエル）の合格率が、現在まで

に98%と、近年にない好成績を出していることや、「合奏などするとき相手に迷惑をかけたくない。友達の演奏に刺激される。間違いの早期発見ができ、解らなければすぐ指導が受けられるので、早く進むようになった」など、自己の技を磨くための練習につながる意見が多く見られたことなどから判断し、集団指導の導入は、練習意欲を高める上で大いに効果があったと思う。しかし、指導状況は有機的とはいいがたい。例えば、弾き歌いの課題であるが、音閉鎖の状態では練習をするとき、指導者も学生同様ヘッドホーンを付けるため、演奏音は検聴、指導が可能であるが、歌の指導は不可能な状態に置かれている。従って、音解放にしたとき歌声の調子に戸惑いを見せる者が多く、弾き歌いとしての意義が薄れてしまう。練習方法を模索し効果的なものにしなければならないと思う。それにつけ、音楽科教科目内での連携を痛感する。そこで、器楽以外の音楽科目の中で、M. L. を利用した授業展開の可能性を思索してみた。

① 音楽理論 (1年前期・必修) ・声楽 (1年前後期・選択)

音楽理論は講義科目であるが、理解を深めるためには、鍵盤上の実習を伴った学習が必要である。今までも以下に示す内容の鍵盤学習は何らかの形で実施されていた。しかし、器楽学習に結びつけられないのは、よく理解されていないからであろう。そこで、選択ではあるが、ほとんどの学生が履修する声楽と連携、繰り返し学習をさせるようにしたい。

学習内容

- ア 鍵盤上で長音階、短音階ならびに調の相互関係、5度圏、音程などの理解。
- イ 主要三和音、副三和音、属七の和音の基本形とその転回に対する理解。
- ウ 和声学 (音の進行、重複、終止形) に対する理解。
- エ ソルフェージュ

② 教材研究 音楽 (3年前後期・必修) ・幼児の表現 音楽 (3年前後期・選択)

両教科とも免許を取得する学生にとっては欠かせないものである。とくに幼児教育では環境の整備と感性の育成が重視されるようになった。教育者の資質は、このどちらにも影響をもたらすものである。従って、ここでは学生の資質向上をねらい、①と器楽Ⅰの学習で会得したことを礎として、即興演奏、創作、伴奏付け、複数の楽器 (打楽器を含む) とのアンサンブルなど、M. L. 機能を駆使した学習を行い、音楽することの楽しみを十分味わわせたい。また、その経験が教育現場に出たとき役に立つものでもありたい。ただし、両教科の中で無駄な重複がされないように、課題や難易度について話し合いがされなければならない。

③ 器楽Ⅰ (2年前後期・必修) ・器楽Ⅱ (3年前後期・選択)

器楽Ⅰでは、①のア～ウの復習を兼た学習から入り、簡単な曲での移調奏、リズム変奏、幼児歌曲での伴奏付け (両手伴奏を含む) と4手連弾 (2人組)。

器楽Ⅱでは、小学校共通教材での伴奏付け、初見の練習、②の課題、即興演奏や創作 (2人でのアンサンブル創作を含む) 8手連弾 (4人組)。

今年度実施している器楽Ⅰでの弾き歌いは廃止し、個人レッスンで行なう。ただし、その歌曲の練習は、集団指導の場 (移調奏、リズム変奏など) で練習されることになる。集団指導では、①～③までの相互関連を強化させるためにオリジナルのテキストを作り、それに添った指導を展開するようにしたらと考える。また、器楽Ⅱでも、本人のもつ力を十分発揮できるような授業展開にしていきたい。

終 わ り に

現在「器楽Ⅰ・Ⅱ」の授業は、常勤4、非常勤4の計8名で担当しているが、それはピアノの個人レッスンであって、M. L. の集団授業は、今年度、本文の著者と他1名で担当している。カリキュラムの作成をはじめ授業展開の在り方等についての検討は、常勤全員が参加し取り決めたことである。従って、本来ならば全員がこの研究報告者となるべきであるが、今まで行なってきた授業方法の可否を問う意味もあって、今回は、直接授業に携わっている著者によって報告をしたが、アンケートの集計ならびに考察では、伊藤充子講師に協力をして頂いたので、ここに申し添える。

本学での集団レッスンは、未だ試行錯誤中である。例年、夏に全日本電子楽器教育研究会が開催されている。この夏も大会に参加し、他の大学、短大での授業方法など、情報や資料をたくさん得ることが出来た。こうした資料等を参考にして、効率のよい指導が出来るように、今後も研鑽を積みたいと考えている。

要 約

器楽教育では、限られた時間の中で、能率的にかつ効果的に学習をしなければならない。鍵盤楽器を学ぶには、基礎学習が何より大切であり、きめ細かい個人指導が重要だと思われる。

児童教育学科の器楽履習の充実を計るために1993年度に購入された M. L. は、当初はピアノ台数の不足を補充するものと受けとめられがちであったが、機器が持つ高性能を活かせば、初心者でも簡単に演奏が楽しめ、技術の習得が容易となるシステムでもある。そこで、昨年度後期より、今まで行なってきたレッスン方法を少し変更し、1コマの中に、ピアノの個人レッスンと M. L. 集団レッスンを取り入れた並行授業の実施に踏み切ってみた。

授業内容は、従来通りの進度別個人レッスン（ピアノ）と、2年生は、スケール・カデンツ移調奏、弾き歌い。3年生は、初見、伴奏付けなどの課題レッスン（M. L.）である。

この内容での集団学習を、学生はどのように受けとめているだろうか。調査してみた。その結果、M. L. でのレッスンは、良いと思われる半面、個人の演奏技術にかなり差があるため、上級者には進度が遅く、初心者には進度が速すぎるという問題点が出ている。この問題解決の1方法は、グレード制の導入であるが、外部刺激が少なくなると、自分のいるグレードに甘んじ、練習を軽んじる学生も出だすのではないかと懸念される。課題の適否と共に、今後の検討課題である。

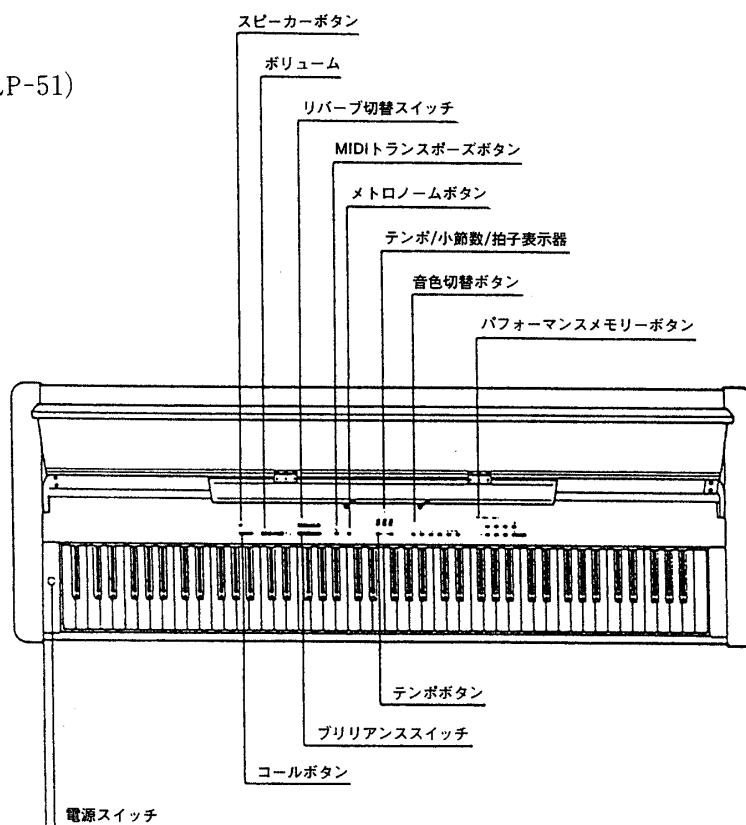
現在の本学、器楽学習期間は、1年あるいは2年という短いものである。この短期間内に、効率のよいレッスンをなし、高度な演奏技術獲得の成果を上げるためには、ピアノと M. L. の並行レッスンを、如何に充実させていくかである。今年度、テレビモニターが設置されたことで、指導者の手元や補足教材を見せることが出来るようになり、指導がより容易となってきた。諸問題の検討と共に、授業の在り方についても追求していかねばならない。

最後に、各機器の名称等の説明は、機器取り扱い説明書を参照したのでここに付記する。

(図 1)

学生用の機器 (MLP-51)

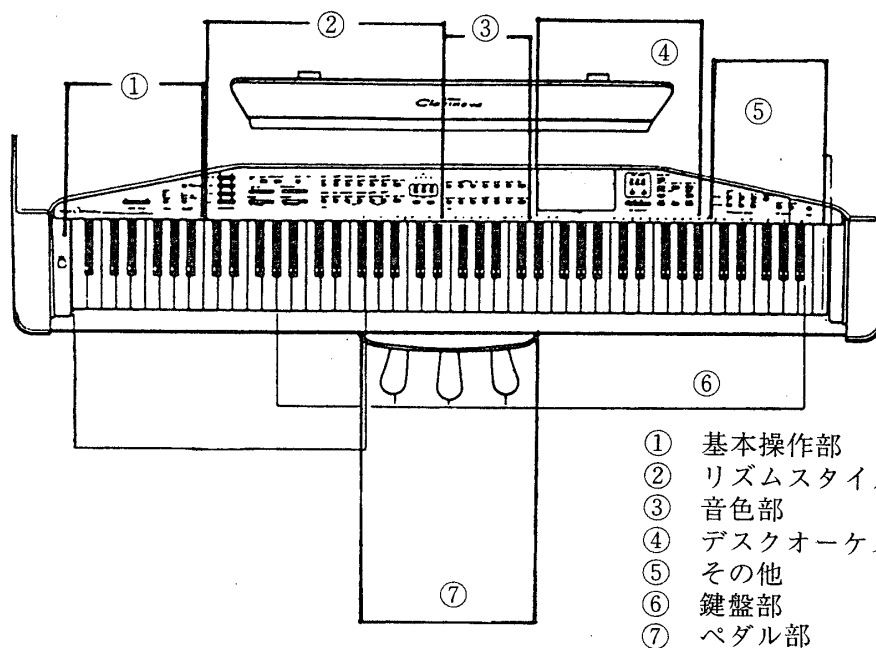
各部の名称



(図 2)

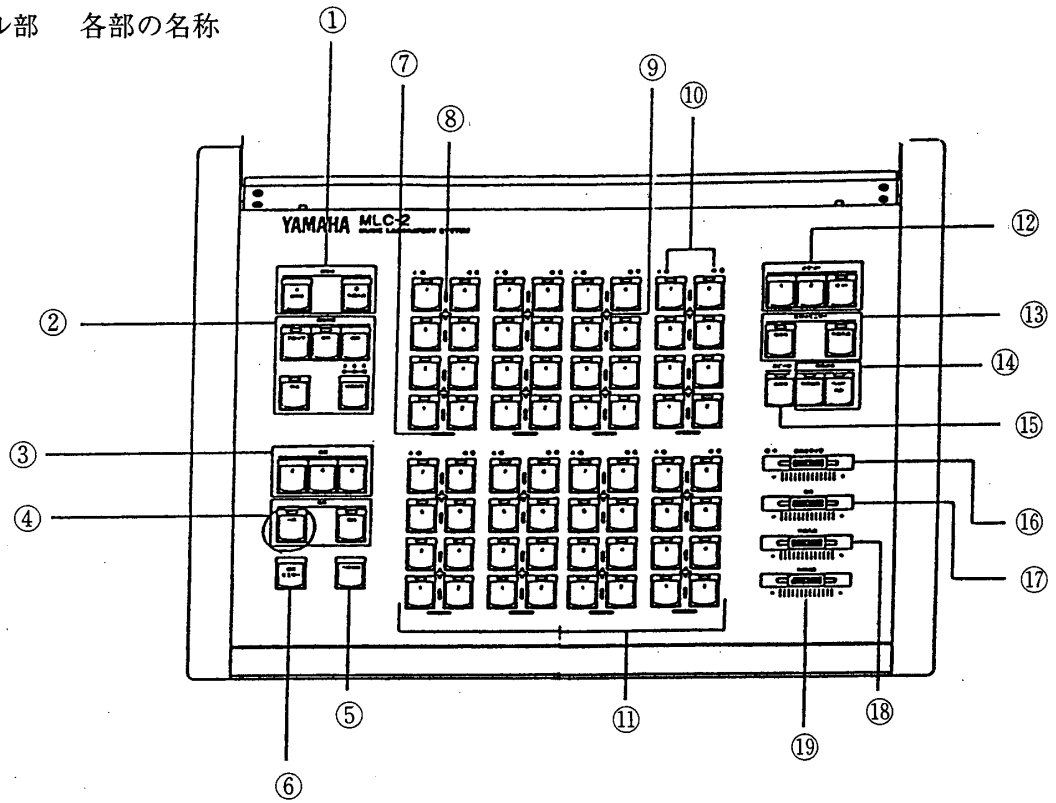
教師用の機器 (CVP-65)

各部の名称



(図 3) 調整卓 (MLC-2)

コントロール部 各部の名称



- | | |
|---------------|-------------------|
| ① 音素材 | ⑪ 子機選択ボタン |
| ② 自動検聴 | ⑫ メモリ |
| ③ 合奏 | ⑬ 音素材モニター |
| ④ 指示 | ⑭ 模範演奏 |
| ⑤ 一斉解除ボタン | ⑮ スピーカー |
| ⑥ 合奏モニターボタン | ⑯ 指導者マイクボリューム適ランプ |
| ⑦ ブロック表示ランプ | ⑰ 生徒ボリューム |
| ⑧ ペア表示ランプ | ⑱ 外部入力ボリューム |
| ⑨ 4人グループ表示ランプ | ⑲ 外部出力ボリューム |
| ⑩ 音素材表示ランプ | |

正面部

